

熊本国際交流会館 第3会議室

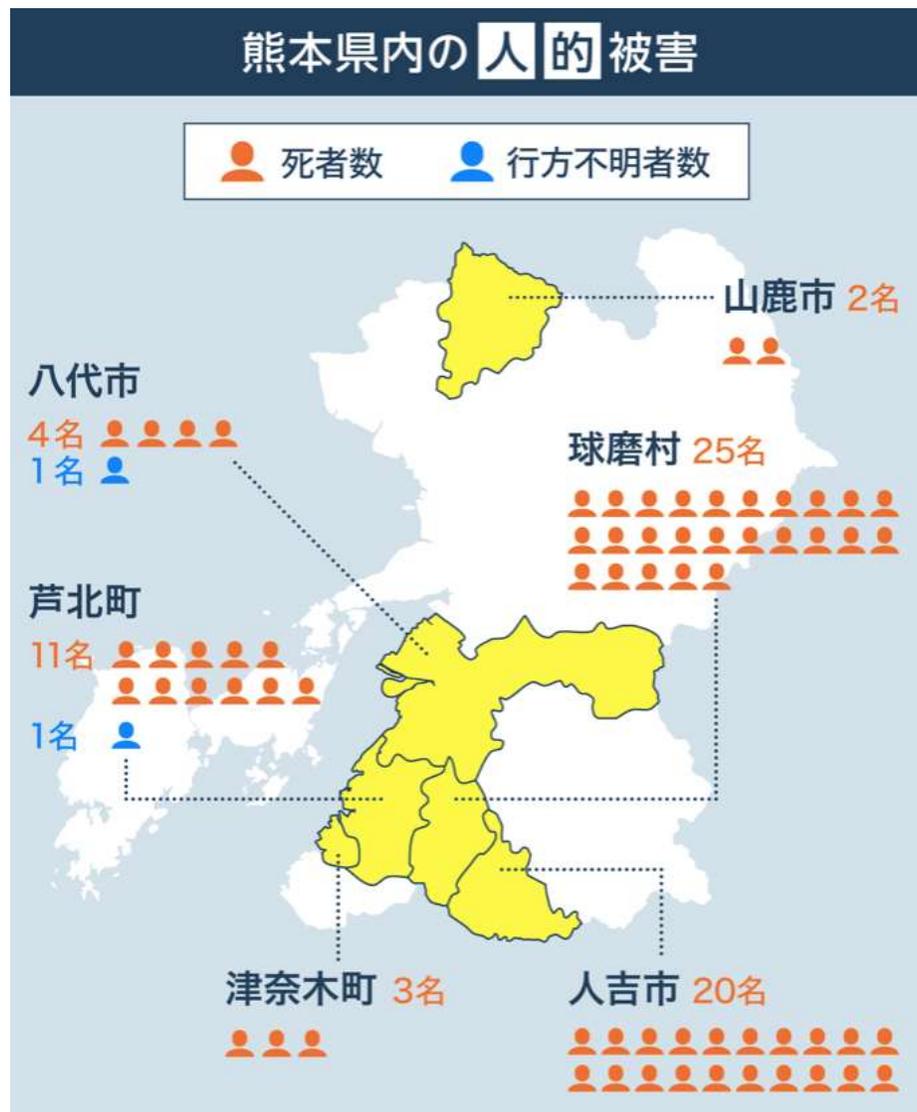
2024.12.15

なぜ、
研究集会「気候変動による豪雨災害と河川法
～熊本豪雨被災地からの問題提起～」
なのか

森 明香（高知大学／手渡す会）

s.mori@kochi-u.ac.jp

球磨川流域の被害状況



<https://news.yahoo.co.jp/pages/20210704a>

- 2020年7月4日未明に発生した線状降水帯は、球磨川の全流域に豪雨をもたらした。特に強い雨が降った中流域では、支流や谷沢はほぼ全て崩れ、山からも大量の土砂や流木が流れ込み、甚大な被害
- Ex. 人吉地点、28時間程で7月1ヶ月分の雨量
- 熊本県内で死者65名、うち50名が球磨川流域。2名が現在も行方不明、49名が溺死（疑い含む）。流域の浸水被害は6,110戸（県災害対策本部会議資料）
- 日本各地でも大雨。全国で死者82名、行方不明者4名、全半壊4,558棟、住家浸水13,934棟（国交省「令和2年7月豪雨による被害と対応」20200824）
- ピーク時、1,814戸・4,217名が仮設住宅等に入居。24年11月末現在、187戸・340名が仮住まい（熊本県健康福祉課）
- **洪水常習地だが、未曾有の災害。その解明は被災者／手渡す会にとって非常に重要だった。しかし…**



「今回の豪雨災害を受けて、国及び流域市町村の皆様と、令和2年7月球磨川豪雨検証委員会を設置し、科学的そして客観的な検証に取り組み、10月6日の第2回検証委員会をもって必要な全ての項目を検証することができました」（20201119県議会）

- 「令和2年7月球磨川豪雨検証委員会」（国交省・熊本県）
- - 九地整局長、県知事、流域12市町村首長を委員として8/25に開始。第2回（10/6）で終了
- 今次洪水のピーク流量約8,000 m³/s（人吉地点、後に7,900 m³/s）と推定、川辺川ダムがあれば流量4割カット、浸水面積6割減とシミュレーション … 計算の前提が不透明、洪水痕跡との不一致も
- - 何が被害を拡大させたのかに関する要因群やメカニズム解明に向けた議論は希薄 Ex. 山の皆伐・乱伐、既存ダムや橋梁など構造物の影響は不問
- 2020年11月19日、流水型ダム建設を前提とした「緑の流域治水」を表明 … 「寝耳に水」
- - 「30回以上現地で声を聞き民意を探った」。一方で、被災者が声を届けづらく不十分との指摘も（熊本日新聞世論調査20201229、森2021a）
- - 被災者の多様な声に応えない国・県。やむを得ず、被災者・支援者自らが市民調査に着手

朝日新聞 2020年11月20日 朝刊 1ページ 東京本社

川辺川ダム容認表明

熊本知事 豪雨被害受け転換

流水型「極限まで環境配慮」

熊本県南部を中心とした7月の記録的豪雨で氾濫した球磨川の治水対策をめぐり、蒲島郁夫知事は19日、支流である川辺川への治水専用ダム建設を認める考えを県議会に表明した。川の水を流しながら洪水時だけ水をためる「流水型」ダムを国に求める。蒲島知事は2008年に川辺川ダム計画の「白紙撤回」を表明し、ダム以外の治水策を検討してきたが、多数の犠牲者が出た豪雨災害を受けて方針転換した。

▼2面▶ダムなし治水撤回、36面▶覆した豪雨

熊本県南部を中心とした7月の記録的豪雨で氾濫した球磨川の治水対策をめぐり、蒲島郁夫知事は19日、支流である川辺川への治水専用ダム建設を認める考えを県議会に表明した。川の水を流しながら洪水時だけ水をためる「流水型」ダムを国に求める。蒲島知事は2008年に川辺川ダム計画の「白紙撤回」を表明し、ダム以外の治水策を検討してきたが、多数の犠牲者が出た豪雨災害を受けて方針転換した。

川辺川ダム建設予定地=18日、熊本県、本社ヘリから、稲英治撮影

川辺川ダム計画

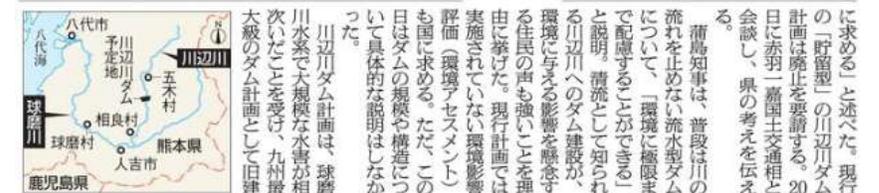
球磨川流域で1963年から3年続いた水害を受け、国が66年に計画を発表。総貯水量は1億300万立方メートル。治水のほか発電、農業利水も目的としていたが、2007年に利水事業が撤退。同一年、電源開発が発電事業から撤退した。09年に旧民主党政権が中止を表明。当初350億円とされた総事業費は3300億円に膨らんでいた。

蒲島知事は県議会を会場に「住民の命を守る。地域の宝である清流を守る。新たな流水型のダムを国に求める」と述べた。現行計画では、環境に極限まで配慮することができると説明。清流として知られる川辺川へのダム建設が、環境に与える影響を懸念する住民の声も強いことを理由に挙げた。現行計画では、実施されていない環境影響評価（環境アセスメント）も国に求める。ただ、この日はダムの規模や構造について具体的な説明はしなかった。

川辺川ダム計画は、球磨川水系で大規模な水害が相次いだことを受け、九州最大級のダム計画として旧建

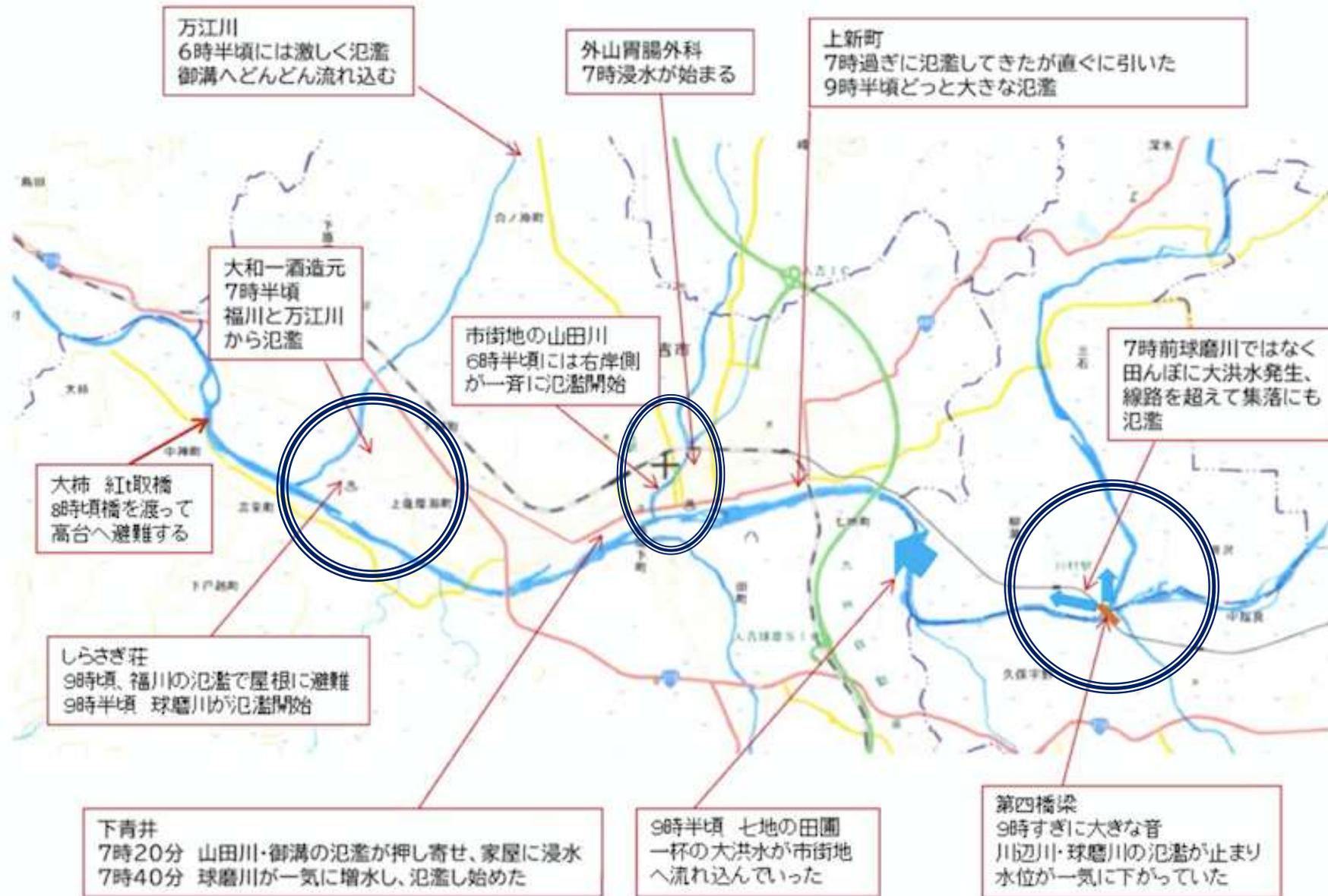
蒲島知事は、普段は川の流れを止めない流水型ダムについて、「環境に極限まで配慮することができ」と説明。清流として知られる川辺川へのダム建設が、環境に与える影響を懸念する住民の声も強いことを理由に挙げた。現行計画では、実施されていない環境影響評価（環境アセスメント）も国に求める。ただ、この日はダムの規模や構造について具体的な説明はしなかった。

川辺川ダム計画は、球磨川水系で大規模な水害が相次いだことを受け、九州最大級のダム計画として旧建



人吉市街地へ氾濫した洪水の調査結果

黒田弘行さん作成
資料に加筆

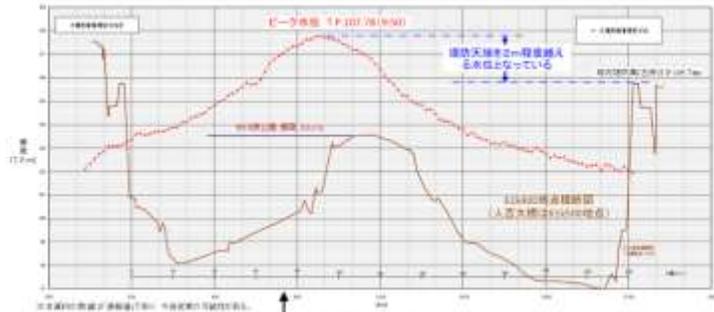


- 手渡す会、洪水直後から165名以上の証言と2000枚以上の写真や映像を収集し分析・検証（2024年11月末現在、300名+2500枚以上）
- -どこからの水が、いつ、どのように来て流下していったか
- -各地点の時間ごとの雨量と映像、証言を照合し、洪水痕跡を確認するなど往還作業を繰り返す
- 行政調査では浮上・検証されなかった論点や被害を確認

Q12. 球磨川第四橋梁の流出により、下流部に急激な水位の変化をもたらし、下流に大きな被害をもたらしたのではないのでしょうか。

○ 令和2年7月豪雨時の球磨川第四橋梁の流出による影響について、球磨川第四橋梁の流出時間は把握できておりませんが、球磨川第四橋梁より下流の人吉大橋に設置している危機管理型水位計等の10分ごとの水位データにおいて、段波などの急激な水位の変化は確認されていないことから、橋梁の流出が下流に大きな被害をもたらしたのとは考えにくいところです。

○ 球磨川第四橋梁より下流の大きな被害については、そもそも河川の流量が非常に大きく、河川の流下能力を超えるものであったため、大きな被害をもたらしたと考えられます。

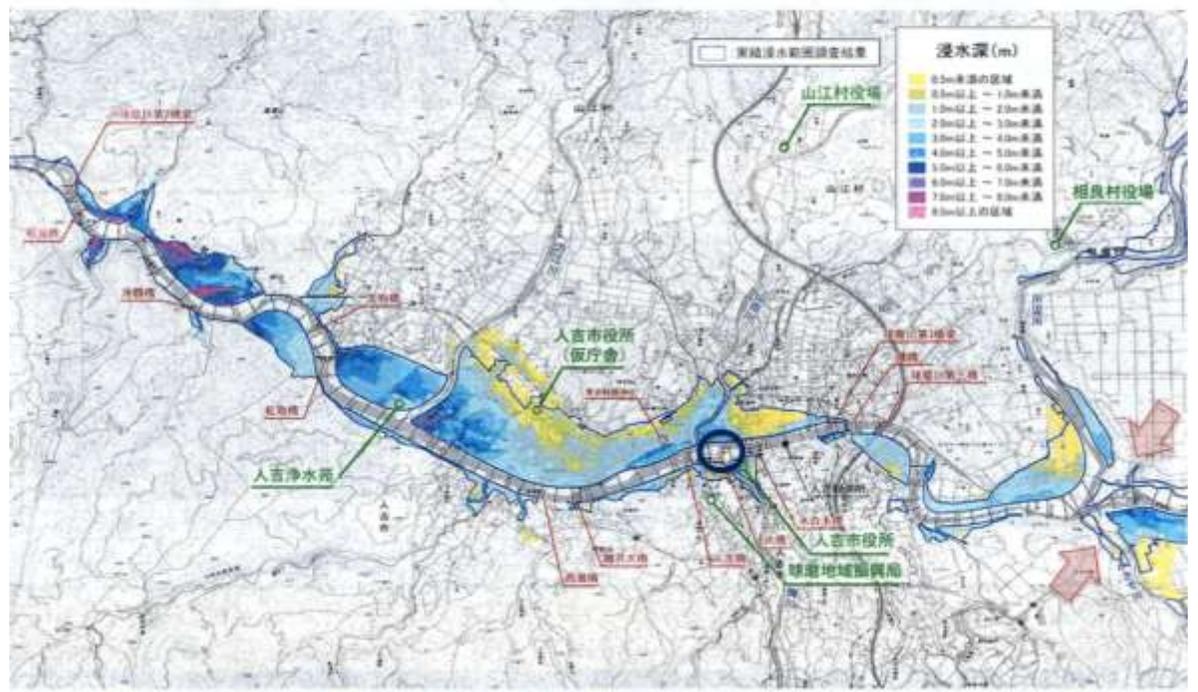


※人吉水位観測所は、7月4日午前8時30分以降「欠測」
 図 人吉大橋危機管理型水位計の観測水位



2. 流量の推定について(氾濫解析結果) 25

○越水を考慮した氾濫解析により得られた浸水区域は、実績浸水区域を概ね再現できていることを確認。



- 実績とズレのあるシミュレーション(川辺川と球磨川の合流点/第四橋梁直上の矢印の先の青線で囲まれた白抜き部分)を「概ね再現」と評し、不問
- 被災者らから繰り返し問われると、5キロほど下流の人吉大橋危機管理型水位計データに異常な波形が見受けられず、ゆえに問題はない、と主張

山田川など支流は「バックウォーター現象」ゆえダムで本流の水位を下げればよい、と総括

球磨川支川の氾濫形態と治水対策の方向性【人吉部・上流部①】 6

○人吉市街部では、本川からの氾濫に加え、本川の水位上昇により、万江川、山田川、胸川などの支川の水位も上昇した。その結果、洪水が流れにくくなるバックウォーター現象が発生し、支川からの氾濫も発生した。球磨川上流の本支川合流部でも同様のメカニズムにより氾濫している。

○一方で各支川のバックウォーター区間より上流側では、洪水は河道内を概ね流下している（一部区間を除く）。

○支川堤防高のうち、本川の影響を受ける区間は、球磨川本川堤防と同じ高さを基本に整備を進めている。そのため、球磨川本川の水位を堤防天端高さ以下に下げること、支川の水位を低下させ、支川からの氾濫を大きく改善できる。

○また、河道掘削や堤防の強化など必要な対策も実施する。

第2回流域治水協議会説明資料



- 市街地を流れる川幅は狭く、昭和期に線路より上流側は連続堤防化が進み、鬼木川も付替えられた（以前は線路の下流側で合流）
- 山田川と合流する球磨川も、1950～60年代は中川原を挟み左岸側に多く流れるようになっていた。現在は左岸の堆砂により右岸側に多く流れるため、より災害リスクの高い川と化している



ダム計画 説明不足を露呈



相次ぐ懸念、建設期待も

これまでに手渡す会が熊本県に行なった申入れと交渉内容（交渉していない申入れ書のみは別途あり）				
	日付	タイトル	備考	県の回答の概要
2022	8月23日	共同検証の申入れ	危機管理型水位計は計測できていたか？	国に照会したが計測できていた、共同検証はしない
	9月12日	人吉大橋・危機管理型水位計をめぐる県の見解を求める要請書	8/23に申し入れた内容を国に照会するよう項目を伝える	今回指摘を受けたしびき水や洪水痕跡について、国や知事に伝える
	10月21日	球磨川水系に関するFAQならびに台風14号に関する申入れ	9/12要請に対する回答を求める+市房ダムサーチャージまで2センチ	知事と国交省に伝えた。FAQの表現を変えた（「しびき水」削除）。市房ダムは適切に操作して効果を発揮した
2023	3月13日	球磨川流域豪雨災害・被害拡大のメカニズムの探求を求める要請書	「美しい山河を守る災害復旧基本方針」に則り、第四橋梁閉塞による洪水への影響を検証せよ	第四橋梁による影響が皆無とは思わないが共同検証はしない
	7月14日	安心・安全部会における山田川復興計画案に関する申入れ	6/20山田川河川改修案について	今次洪水で230t/s流れた根拠/シミュレーションを次回示す
	11月10日	「球磨川水系山田川河川整備に関する説明会」9/30をめぐる申入れ	人吉市にて開催の説明会、バックウォーターのみで説明するのは妥当か質す	県独自の検証はしておらず2020年の検証委の資料を用いて「バックウォーターは住民の証言」「どうすれば理解してもらえるのか」。共同検証は拒否
2024	9月10日	これまでの山田川の氾濫と災害に関する申入れをめぐる確認および申入れ	山田川の氾濫に関する県調査の生データの開示を求める	2020年検証委、2022FAQ資料を用いてのみ回答、生データは出さず、共同検証は頑なに拒否

※県からの回答は全て口頭のみ、住民から照会せねば回答はない。県独自の検証資料が提示されることは皆無

※通常、河川港湾局河川課、球磨川流域復興局の職員5~8名が対応

- 市民調査の成果を携え、「流域のあらゆる関係者と協働」を掲げる国・県に対し、未検証の事象・論点をめぐる（豪雨災害の実態解明におけた）共同検証を申入れ続けてきた
- 国は「HPで説明済み」と同席・回答をせず、県は「国が言っている」「河川整備計画で決まっている」と繰り返し口頭で回答

災害実態に見合わぬ河川整備計画でも、決定すれば計画に則って進められる。それでいいのか

人吉球磨、そして八代・芦北を中心に甚大な被害をもたらした7月の熊本豪雨。県内で65人が死亡、2人が行方不明となった。人吉総局管内の人吉市と球磨村だけでも、球磨川の氾濫で45人の犠牲者を出し、多くの家屋が被災した。倒壊した家屋や波打つようにゆがんだ肥薩線の線路、崩落した橋…。1カ月をすぎても目を覆いたくなるような風景が今も残る。

熊日はこの間、多くの記者が災害現場を訪れて取材。紙面を通して住民の声や被災地の現状を読者に伝えていく。その取材の中で、不思議に思うことがある。それは、被災者たちが異口同音に「球磨川は悪くない」と球磨川をかばう言葉を口にすることだ。

球磨川から人吉市街地に水があふれ出す様子を目の当たりにした時、そして土砂降りの雨の中、水に没した球磨村渡地区を見た時、正直私は「球磨川は恐ろしい」と思った。でも、取材で話を聞いた人たちは違った。

知人が球磨川の濁流にのまれ、亡くなったという女性は、その死を悲しみながらも「球磨川のことをどうしても恨めない。憎いと思えないんです」と声を押し殺した。店舗も自宅も濁流と汚泥でめちゃくちゃにされた男性も「水害は怖いけど、球磨川は怖くないし、球磨川は悪くない。球磨川への思いと水害は全く別。今回は俺たちが油断しとったった」と苦笑交じりに話した。

球磨川への思い 受け止めたい 人吉総局長・吉田紳一

そんな被災者たちが「悲しい」と感じたのが、球磨川を「暴れ川」と表現した報道だったという。「暴れ川」という表現を「とてもつらい」と言った男性は、「身内の方が亡くなられた人たちは今は複雑な気持ちだと思えますが」と断った上で、「球磨川は昔から流域の住民に多くのものを与え続けてくれていいます。地域や人々の生活を支えてくれた存在であり、時に癒やしの場でもあるんです。球磨川が悪者のように言われるのはつらい」と訴えた。

地震や台風、そして今回のような豪雨…。近年、全国各地で大災害が相次いでいる。災害の状況は似ていても、その場所で生きる被災者の思いはさまざま。それぞれの被災地に、その土地の自然と向き合い、生きてきた人々の思いや暮らしがある。災害報道でないがしろにできない大切なものを今回、「球磨川」が教えてくれた気がしている。

発生から1カ月がすぎ、各メディアでも豪雨関連の報道が減少傾向にある。「被災者に寄り添う」。災害が起こると必ず耳にする言葉だ。記事を書き続けることが寄り添い方の一つかもしれない。ただ、その土地の人たちの身近な自然に対する敬意や歴史にも心を配りつつ記事を書くことが寄り添うためには大切だと感じている。まずは、地元の方たちの球磨川への思いをしっかりとして受け止めたい。

- 球磨川の恩恵を受けたくらしのなかで、川と共生するための在り方や知恵を流域の人びとは培ってきた。気候危機時代こそ、川の保全を前提とした水害対策は、国際的なスタンダードでもある
- しかし現行の河川法／河川政策は、球磨川流域の人びとが培ってきた知恵も市民参加をも蔑ろにし、川を壊し続けている